

令和6年度後期企画展

古代と 中世の 四倉



高倉山古生層産出 三葉虫
[いわき市蔵]



木造文殊菩薩騎獅像
[薬王寺蔵]



木造地藏菩薩立像
[長隆寺蔵]

奥州磐城薬王寺来由記 [薬王寺蔵]



『いわき市の文化財』
(いわき市教育委員会 2017) より

いわき市立いわき総合図書館

〒970-8026 福島県いわき市平字田町120
TEL: 0246-22-5552

開催にあたって

いわき市は、昭和41年に14市町村の大同合併により誕生した広域市で、旧市町村はそれぞれの歴史と文化を持ち、合併後もその特徴を生かし発展しています。

今回は、仁井田川を中心に鉾山と平野、港を土台として古代より栄えてきた四倉を取り上げ、特に古代と中世の文化を今に伝える大野・大浦地区を紹介します。

なぜ四倉は優れた文化遺産が数多く有しているのかという疑問から始まり、調べていくほどに悠久の時間と人々の営み、四倉の豊かな文化に触れることができました。

図書館は先人の資料を保存し、次の世代へ繋ぐ場所です。この展示を通して、さらに活用いただければ幸いです。

今回の展示の開催にあたり、いわき市考古資料館、大野公民館、長隆寺、薬王寺に多大な協力をいただきました。感謝申し上げます。

令和6年 10 月

いわき総合図書館

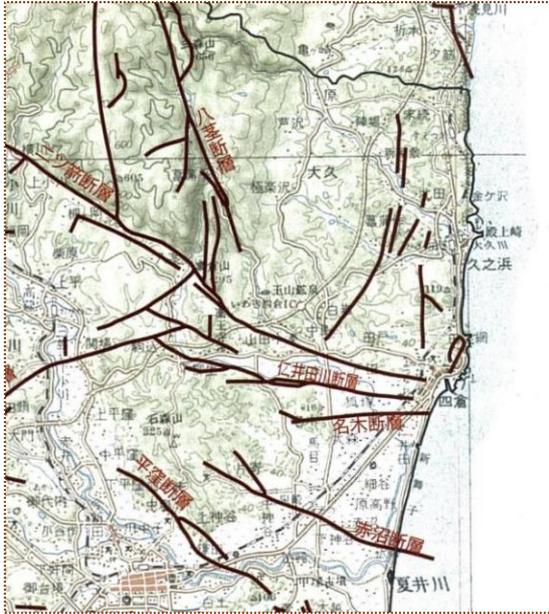


四 倉 (よつくら)

四倉の名前の由来は様々な説があり、定かではない。鎌倉の気候に似ているところから、四方の山を倉に見たてて、四倉としたとも考えられている。

※ただし、駅名は、「ッ」がついて「四ッ倉」になっている。

四倉の地形



市内の断層位置図

『いわき市・東日本大震災の証言と記録』
いわき市 2013

四倉は南北に双葉断層、八茎断層、北西から南東に二ツ箭断層と仁井田川断層等の小断層がある。そのため、北西に八茎山地、北の玉山丘陵と大久丘陵、南西に石森丘陵の間に谷底平野と三角州の平低地が広がっている。

この谷底平野が安定した低湿地になり、古代の開発には最適な条件を持っていたと思われる。

夏井川 流域図

『夏井川とともに 20 年』 夏井川流域
住民による川づくり連絡会 2022

仁井田川は四倉の北西部の猫鳴山・三森山を水源とし、丘陵を南に蛇行し、上柳生で東に流れを変え、下流では平野を形成し、河口付近で横川と合流し太平洋に流れ込む。

本来は上仁井田付近で直接海に入っていたのが、海波によって河口は砂で埋まり、横川となって海岸に沿って流路を作り、夏井川に注ぐようになったと考えられている。



四倉合併の変遷

「町村合併促進法」(昭 28. 10. 1 施行) 【昭和の大合併】

「市制町村制」(明 22. 4. 1 施行) 【明治の大合併】

四倉町
(昭 30. 3. 10)

- 四ツ倉町 — 四倉村
- 大浦村 — 狐塚村、名木村、長友村、上仁井田村、
下仁井田村、塩木村、大森村、細谷村
- 大野村 — 白岩村、戸田村 玉山村 中島村、上柳生村、
下柳生村、山田小湊村、薬王寺村、駒込村、
八茎村、山小屋村

注) 明=明治、大=大正、昭=昭和

『未来へつなぐ「いわき」ものがたり』いわき市 2016

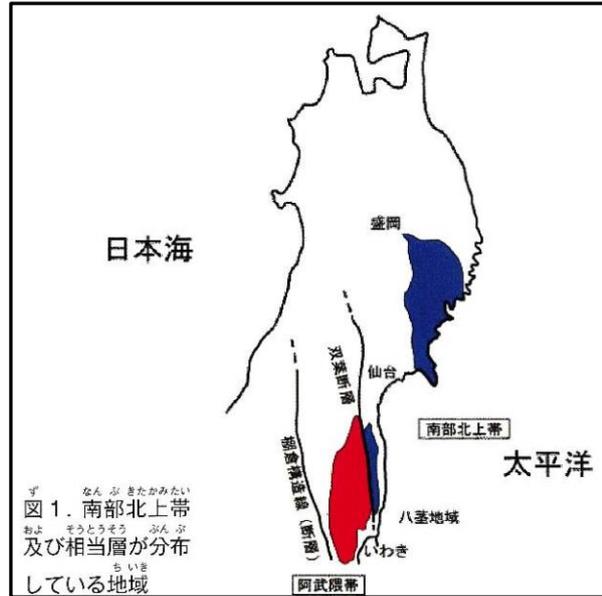
古 生 代

こせいだい 古生代の地層

いわき市で一番古い地層は、四倉町の八葦^{やぐき}と高倉山付近に分布している古生代の地層。

元は古生代ペルム紀の赤道近くの海底堆積物で、プレートの運動により北に移動し、南部北上帯と名付けられ、今の位置に露出している。

阿武隈山地は中生代に活動したマグマによる花崗岩で出来ており、そのマグマの影響で古生代の石灰岩が鉱物を生み出したため、四倉町には鉱山ができた。



『いわきの化石 3 新たな発見』
いわき市教育文化事業団 2023

化石年表	6600万年前	新生代	第四紀	大原自然貝層の時代
			新第三紀	いわきのゾウとクジラの時代
			第四紀	いわきの石炭が形成された時代
	約2億5100万年前	中生代	白亜紀	双葉層群(ふたばそうぐん)いわきの恐竜の時代
			ジュラ紀	
			三畳紀	
	約5億3800万年前	古生代	ペルム紀	高倉山古生層 いわきの三葉虫の時代
			石炭紀	
			デボン紀	
			シルル紀	
オルドビス紀				
		カンブリア紀		

『いわきの化石 2 無脊椎動物・植物編』
いわき市教育文化事業団 2015 を基に作成

さんようちゅう 三葉虫

古生代の海で栄え、絶滅した、クモやカニの仲間である節足動物。体長はほぼ 10 cm 以内。

胴体が中央部分と左右部分の 3 つに分かれているようにみえるので、三葉虫という名前がつけられた。

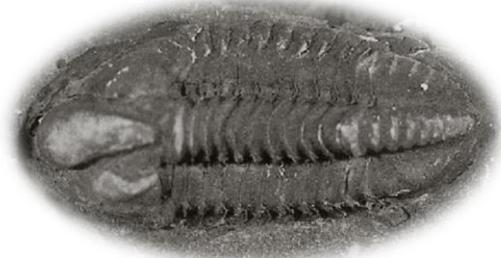
写真の三葉虫は、昭和31年(1956)に高倉山古地層から産出された古生代ペルム紀のもので体長は約 3cm。現在、いわき市石炭化石館に展示されている。

たかくらやまこせいそう 高倉山古生層

昭和28年(1953)、平地学同好会(地学を愛好する市民の研究団体)の野外調査により、高倉山付近で古生代と特定できる化石が発見された。

古生代の化石を産出する貴重な地層は、昭和47年(1972)に「高倉山古生層」として市指定天然記念物になった。

現在、化石産出地は私有地のため、立入禁止となっている。



高倉山古生層産出三葉虫
(エンドプスヤナギサワイ) いわき市蔵
『いわき市の文化財』いわき市教育委員会 2017

古代の年表

時代	年代	できごと (いわき関係は太字)
弥生時代	BC2~3世紀	日本列島で米づくりが始まる いわきの山間部に村ができる (作B遺跡)
	BC1世紀	この頃、倭という国があった いわきの平野で米作りが始まる (番匠地遺跡、戸田条里遺跡)
	57年	倭の奴国王が中国に使者を送る 中国の王から金印をもらう
	239年	邪馬台国の女王卑弥呼が中国に使いを送る 方形周溝墓がつくられる(平窪諸荷遺跡)
古墳時代	3世紀中頃	古墳がつくられ始まる いわきの平野や台地に村ができる
	4世紀	豪族の館がつくられる(菅俣B遺跡、折返A遺跡) 東北で4番目に大きい前方後円墳の玉山古墳ができる
	5世紀	日本最大の古墳「大仙陵古墳」ができる。
	6世紀	人物や動物のはにわを置いた古墳(神谷作古墳群、後田古墳群)
飛鳥時代	6~7世紀	丘の斜面に横穴の墓が作られる(中田横穴、八幡横穴)
	645	大化の改新はじまる(乙巳の変)
	653	「多珂国造のくに」を石城評と多珂評に分ける
奈良時代	710	平城京に都が移る
	718	石城国ができる(数年で廃止) 菊田郡ができる
	719	石城国に駅家を置く
	723	三世一身の法ができる この頃、「石城」を「磐城」と書くようになる 磐城郡役所(根岸遺跡)や菊多郡役所(郡遺跡)が整備される
	759	万葉集がつくられる
平安時代	794	平安京に都が移る
	811	磐城の駅家が廃止される
	850	この頃、磐城郡の長官が橋や蔵をたくさん建てる(荒田目条里跡)
	869	東北で大地震が起こる(貞観地震)
	935	平将門の乱がおこる
	1008	源氏物語ができる
	1015	東北で大規模な戦乱が起こる
	1124	平泉の藤原清衡が中尊寺をつくる この頃、白水阿弥陀堂ができる
	1180	源平合戦が始まる
1183	平氏が滅びる(壇ノ浦の戦い)	



古墳時代の庶民の服装



夏井廃寺の瓦



平安時代の貴族の服装

参照 『みんなで学ぼう いわきの歴史』(いわき市教育文化事業団 || 編 いわき市教育委員会 2023

* カットは「いわき七浜イケメンプロジェクト」の四倉の海を擬人化した「四倉亀吉」のオリジナルイラスト

古代

とだじょうりいせき 戸田条里遺跡



『戸田条里遺跡』いわき市教育委員会 1991

条里とは、7世紀の律令制のもとで始められた古代の耕地の規格。方1町の坪区画(一辺約109mの四角いの地割)を基本にしている。

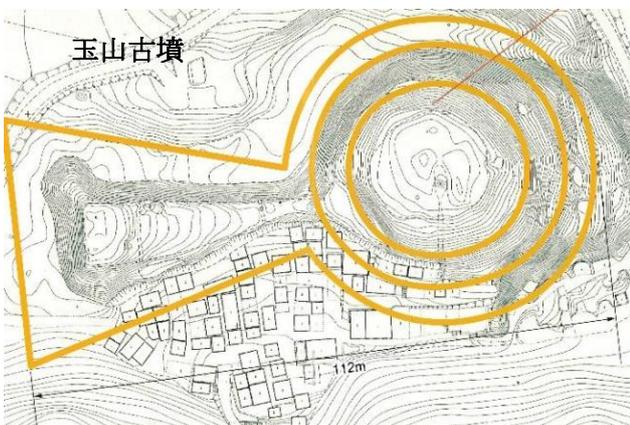
四倉町戸田南地区は、耕地整備のため、昭和63年(1988)と平成元年(1989)に発掘調査が行われ、縄文時代から江戸時代の遺跡が重なって確認された。遺跡から、弥生時代にはすでに水田が造られ、古墳時代には集落が営まれ、北に長い地割は平安時代の形を踏襲していることがわかった。

たまやまこふん 玉山古墳

四倉町玉山にあるいわき市最大の前方後円墳。昭和55年(1980)に福島県史跡に指定。

古墳は仁井田川の下流域の先端丘陵に立地し、河口域や太平洋が見渡せる海上交通と陸上交通の要衝の地にある。

平成16年(2004)から平成20年(2008)にかけて調査された。全長112mは東北でも4番目に大きく、古墳の形や規模、遺物から、古墳時代の初め頃(4世紀)に造られた、畿内勢力と結びついていた市内最大の盟主的人物の墓と想定される。



『いわきの古墳時代 1』
いわき市教育文化事業団 2021



『地図からいわきの歴史を読む』
鈴木貞夫 2002

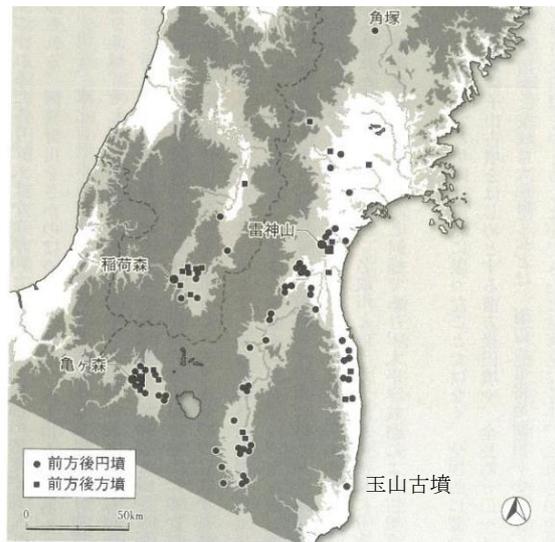


図11 東北における前方後円墳・前方後方墳の分布

『海から読み解く日本古代史』
近江俊秀 朝日新聞出版 2020



8世紀中ごろの東北地方

『みんなで学ぼう いわきの歴史』
 いわき市教育委員会 2023

ねぎしかんがいせきぐん
根岸官衙遺跡群

いわき市平下大越および豊間にある根岸遺跡と夏井廃寺跡を合わせた総称。官衙は役所を意味する。

根岸遺跡は、昭和48年(1973)から平成20年(2008)の発掘調査で役所の政庁跡、正倉跡、豪族住居跡などが発見され、7-9世紀の磐城郡役所跡と考えられている。夏井廃寺跡は、昭和41年(1966)から平成16年(2004)の発掘調査で塔跡、金堂跡、講堂跡などが発見され、郡役所に関連する7-10世紀の寺院と考えられている。平成17年(2005)、古代の地方支配体制を示す史跡として、国指定史跡となった。



海から見た根岸官衙遺跡群

『国史跡 根岸官衙遺跡群』いわき市教育委員会 2008

おおさん だいせき
大猿田遺跡

常磐自動車道の建設に伴い、平成7年(1995)から平成9年(1997)に発掘調査され、四倉町中島、現在の四倉インターチェンジにあたる場所に古墳時代から平安時代の遺跡が確認された。

8世紀後半の斧の柄等の木製品が出土したことから、古代磐城郡役所の木製品の工房だったと考えられている。また、『倭名類聚抄』に記された磐城郡玉造郷の存在を示す「玉造」の文字が書かれた木簡や土器等が発見された。



磐城郡のおもな生産遺跡

生産品は河川を通じて郡役所に運ばれました。

『いわきの古代』いわき市教育委員会 2009

古代の地方行政

古墳時代は豪族が各地を支配していたが、古墳時代後期になると、地方豪族は、畿内を中心とした勢力から「国造」という称号を与えられ、それぞれの在地社会を支配するようになった。

大化の改新以降、大和政権は地方を国・評・里に分け、役所をつくった。

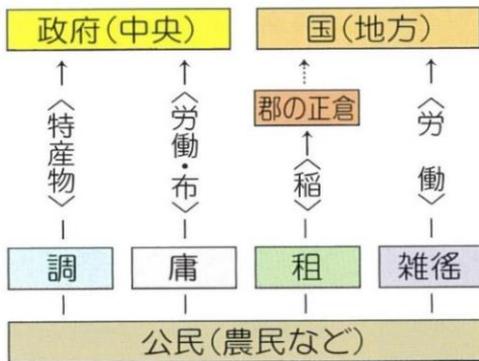
※のちに国・郡・郷に改められる。

地方の行政制度



『石城国建国千三百年展』いわき市考古資料館 2018

古代の主な税



『いわきの古代』いわき市教育委員会 2009

郡の仕事には、税を集める事、戸籍・帳簿を作成すること、農業をさかんにする事、商品の流通の管理、手工業製品の生産などがあつた。

郡の役所の近くには、国や郡の緊急連絡や移動のために、港、駅家(うまや)、伝馬が置かれ、交通が整備されていった。

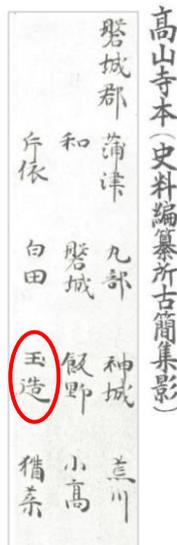
※駅家は、国と地方を結ぶ道路沿いに約16kmごとに配置された国の施設、人馬を用意し、宿舎や食料を提供した。伝馬は、駅家の馬とは別に、郡で用意した馬で、地方交通に使われた。



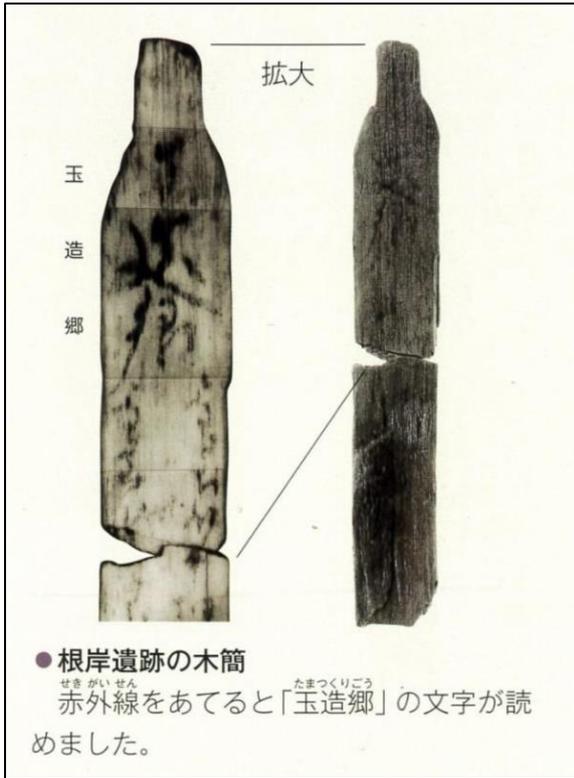
『荒田目条里遺跡』いわき市教育文化事業団 2001

郷の名前

国は現在の都道府県、郡は市町村、郷は行政区にあたる。平安時代に書かれた『倭名類聚抄』によると、磐城郡は陸奥の国に属し、郡の下には、蒲津・丸部・神城・荒川・和・磐城・飯野・小高・片寄・白田・玉造・檜葉の12の郷があつた。



『国史跡 根岸官衙遺跡群』いわき市教育文化事業団 2008



『みんなで学ぼう いわきの歴史』
いわき市教育委員会 2023

『いわき民報』

平成8年8月27日 第11面

もっ かん
木簡

木簡とは、文字などが書かれた木の札。古代で紙の代わりに使われていた。

根岸遺跡では、役所の倉庫である正倉の間の沼から、税として集めた米を納める時についていた木簡が見つかった。

木簡には「飯野郷」「玉造郷」など郷の名前が書かれており、郡内の各地から役所に米が運ばれてきたことがわかった。

※沼には生活に使われた道具などがたくさん捨てられていた。

貴重な遺物が続々

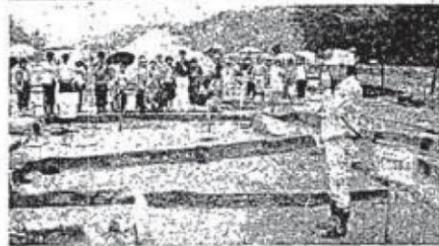
大猿田遺跡で現地説明会

古墳時代から平安時代にかけての貴重な遺物が出土した

四倉町中島の「大猿田（おおさんだ）遺跡」で二十四日、現地説明会（県教委、県文化センター主催）が開かれ、県内各地から集まった約百五十人の考古ファンが数々の貴重な出土品を見て回った。

同遺跡は常磐自動車道四倉インターチェンジの建設計画に伴い、昭和六十年に行われた分布調査で存在が確認された。県教委では平成七年から建設に先立ち、延べ四・三五回の調査を計画。昨年の一次調査に引き続き今年も四月から調査を進めている。

調査では、これまでに古墳時代（六世紀）の竪穴住居跡四軒、奈良～平安時代の竪穴住居跡二十軒、掘っ立て柱建物跡九棟、須恵器（すえぎ）窯跡二基、木炭窯跡三基、水田跡などが見つかった。また遺物では土師器（はじぎ）や



須恵器、灰釉（かいゆう）陶器、多彩陶器、鎗帯（かたい）

竪穴住居跡の説明を興味深く聴く参加者たち

金具、木簡などが発見されている。

「この中でも「玉造」と書かれた黒書土器の発見で、平安時代の書物に書かれ、場所が不明だった磐城郡「玉造」の地名が同地区の玉山から中島のあたりに当たることや、律令時代に使われた官人の身分を示す黒漆を塗った「鎗帯金具」の出土で下級役人が同地に赴いていたのが分かった。

また県内四例目になる、奈良時代に平城京で作られていた鉛釉（えんゆう）陶器や、労役のため人を集める目的で書かれた木簡、全国で四例目に当たる岩を運ぶための長さ一・六メートルの二またのソリ「修羅（しゅら）」の発見など、興味深い遺物が多数見つかった。現在、遺跡の北側は十分な調査が及んでいないため、関係者は「まだまだ新しい発見が期待できる」と話している。

中世の年表

時代	年代	できごと（いわき関係は太字）
鎌倉時代	1185	この頃、鎌倉幕府ができる 頼朝、守護・地頭の任免権をえる
	1189	奥州合戦で平泉の藤原氏がほろびる 岩城清隆が好島荘の地頭になる
	1206	飯野八幡宮が完成する
	1208	好島荘、東西に分かれる 大須賀氏が東荘、三浦氏が西荘の代官となる
	1221	承久の乱おこる
	1232	御成敗式目が制定される
	1247	伊賀氏が好島西荘の代官となる
	1264	恵日寺の木造阿弥陀如来立像が作られた
	1274	元寇(文永の役)がおこる
	1285	薬王寺の一番古い板石塔婆が建てられた
	1295	薬王寺で禅弁が真言律宗の教えを説いた
	1333	鎌倉幕府がほろびる
南北朝時代	1334	建武の新政 いわきの武士が南北朝の戦いに参加する
	1338	室町幕府ができる
	1346	好島荘の地頭、飯野八幡宮放生会流鏑馬の役をつとめる
	1347	恵哲が長隆寺を開山する
	1379	鏡仁が妙見寺を開山する
	1381-84	鎌倉で学んだ僧、甚恵が恵日寺を中興する
室町時代	1392	南北朝の統一
	1397	金閣寺ができる
	1410	海道五郡一揆
	1442	岩城隆忠が岩崎一族の内紛に介入する
	1446	岩城隆忠が鏡祐を迎えて薬王寺を再興する
	1467	応仁の乱がおこる この頃、岩城氏が戦国大名となる
	1483	岩城常隆が大館城をつくった
	1536	恵日寺7世雄仁によって長隆寺が再建される
	1543	種子島に鉄砲が伝来する
	1569	長隆寺の地藏菩薩の錫杖が修復される
戦国時代	1573	室町幕府がほろびる
	1582	本能寺の変がおこる
	1595	佐竹氏による岩城領の検地が行われる
1600	関ヶ原の戦いがおこる	



鎌倉時代の子供の服装



戦国時代の戦の服装

参照 『みんなで学ぼう いわきの歴史』 2023、『図説いわきの歴史』1999

* カットは「いわき七浜イケメンプロジェクト」の四倉の海を擬人化した「四倉亀吉」のオリジナルイラスト

中世

恵日寺



恵日寺の本堂（2023年11月撮影）

じんこうさん びるしやないん
甚光山毘盧遮那院恵日寺は真言宗智山派の寺。
平安時代に僧徳一が開山し、会津の慧日寺と関係が深く、平将門の娘の伝説がある。永徳年間(1381-84)に鎌倉で学んだ僧甚恵が中興したと伝えられる。

岡本寺の別称で学問所として栄えたが、昭和20年(1945)、戦災で全焼し、本堂は昭和39年(1964)に再建された。

木造阿弥陀如来立像

阿弥陀如来は西方の極楽浄土の仏で、すべての人を救う存在として多くの信仰を集めている。

本像は木造寄木造り、金箔を漆で接着させた漆箔像。もとは会津桂林寺に安置されていたが、江戸時代に当寺に寄進されたと伝わる。

像の内側に「奉迎年ハ、文永元年(1264)8月15日公慶」と墨で書かれており、いわき市内で年代が明記されている最も古い仏像といわれている。



木造阿弥陀如来立像 福島県指定重要文化財
(彫刻) 恵日寺蔵 鎌倉時代 (像高 52 cm)
『いわき市の文化財』2017

恵日寺伝説



恵日寺境内のお堂（2023年11月撮影）

諸説あるが、四倉の恵日寺は、平将門の三女、滝夜叉姫の終焉の地と伝えられている。

寺伝によれば、天慶3年(940)、平将門の娘は当寺に逃れて、如蔵尼として地藏菩薩を信仰し、地藏堂を建てたとされる。平安時代末に成立した『今昔物語』と鎌倉時代に書かれた歴史書『元亨釈書』には地藏菩薩と如蔵尼の記述がある。南北朝時代に郡主の娘が如蔵尼に影響を受けて地藏菩薩を信心し、隆恵尼として、当地に草庵を結んだ。

やく おう じ
薬王寺

延寿山教王院薬王寺は、真言宗智山派の寺。寺史によれば、平安時代に僧徳一が奥州布教のおり、八茎嶽に薬師堂を建立したことから始まる。金沢文庫に、当寺において永仁3年(1295)、鎌倉の僧禅弁が真言宗の教典を口述したとの記録があることから、学問所として繁栄したことがわかる。南北朝時代の争乱で全山焼失したが、文安3年(1446)に岩城隆忠が再興し、千葉の僧鏡祐を迎えて開山した。延享4年(1747)の記録には多くの堂宇を持つ大伽藍と記されていたが、慶應4年(1868)の戊辰の役のため、再び焼失した。



薬王寺本堂 (2024年6月撮影)

*金沢文庫は、金沢北条氏の文庫に起源を持つ神奈川県横浜市にある県立の中世歴史博物館。

おうしゅういわき やくおうじらい ゆき
奥州磐城薬王寺来由記

この書は、同寺19世住職の禅海が隠退するにあたって貞享4年(1687)に同寺の由来を記したものに、門弟の実養がつくった禅海の伝記等を加えたものである。後継者の禅海が、宝永6年(1709)に一卷にまとめた。

また、22世圓胤も享保14年(1729)に完成した歴史書『延寿護法録』(市指定有形文化財・典籍)に寺の由来と歴代住職を記しており、東国での布教の実態や醍醐寺、高野山、根来寺で学んだ住職の研鑽ぶりがわかる。



奥州磐城薬王寺来由記 いわき市指定有形文化財(書跡)
薬王寺 蔵 江戸時代 (縦 29.3 cm×横 627.0 cm)
『いわき市の文化財』2017

いたいしとうば
板石塔婆

板石塔婆は、板碑ともいわれる石の供養塔。全国に分布しているが、特に関東地方が多く、鎌倉時代から室町時代に造られた。いわき市内では、薬王寺を中心に分布し、同寺の参道や境内に58基が林立する。

年代は弘安8年(1285)から永和4年(1378)にかけてのもので、この地域を好島東荘として大須賀氏が支配していた頃より、建てられたと考えられる。

花崗岩の高さ1mほどの自然石の上部に二本の横線、その下に仏を表す梵字、供養の趣旨や年月日を彫り込み、下半分を土中に埋めて建てている。



板石塔婆 いわき市指定史跡 薬王寺蔵
鎌倉時代 『いわき市の文化財』2017



ずしいりこんどうほうきょういんしゃりとう
厨子入金銅宝篋印舍利塔

同寺を再興した鏡祐が、師僧から授与された宝器で代々の住職に伝授されている。黒漆塗りの厨子の中に、内側は金箔と漆箔を重ね、和鏡を埋め込み、その上に水晶板を窓にした金銅製の工芸的な文様の供養塔を取りつけている。

厨子入金銅宝篋印舍利塔 国指定重要文化財(工芸)
 薬王寺蔵 鎌倉時代
 (厨子高 22.8 cm 厨子幅 15.6 cm 塔高 10.5 cm)
 『いわき市の文化財』2017

けんぼんちやくしよくみろくぼさつぞう
絹本著色弥勒菩薩像

弥勒菩薩は、末法思想により、釈迦の滅後に人々を救う未来仏として信仰されている。

来迎図は阿弥陀如来が諸菩薩を従える図が多いが、本図は単独の来迎図で、雲に乗って人間界に下降する姿を描いている。傷んだ部分もあるが、絹の布に朱、群青、緑青の彩色を施した華麗な仏画である。



絹本著色弥勒菩薩像 国指定重要文化財(絵画)
 薬王寺蔵 鎌倉時代後期 (縦 155 cm×横 58.8 cm)
 『いわき市の文化財』2017

もくぞうもんじゅぼさつきしぞう
木造文殊菩薩騎獅像

文殊菩薩は知恵を授ける菩薩として信仰されている。釈迦如来の脇侍として、象に乗った普賢菩薩と対になることが多いが、単独では経蔵の本尊となる。

『延寿護法録』に「20世日元が経文を集めて経蔵を建て、磐城平藩主の内藤義孝が、その完成を喜び、本尊として、この像を寄進した。」とあり、内藤家の文書には、元禄16年(1703)と記されている。



木造文殊菩薩騎獅像 国指定重要文化財(彫刻)
 薬王寺蔵 鎌倉時代 (総高 108.8 cm 像高 41.8 cm)
 『いわき市の文化財』2017

ちょう りゅう じ
長 隆 寺

無量山阿弥陀院長隆寺は真言宗智山派の寺。

寺伝によれば、好島荘大野郷の地頭であった岩城小次郎は、長子長隆の早世を悲しみ、長隆が師事していた恵哲を招いて貞和3年(1347)に開山し、長隆の信心していた阿弥陀仏を納めたと伝えられている。

一時荒廃したが、天文5年(1536)に恵日寺7世雄仁によって再建された。



長隆寺の阿弥陀如来 (2024年6月撮影)



長隆寺地藏堂 (2024年6月撮影)

じぞうどう
地藏堂

本堂の左側の地藏堂は、文政3年(1820)、渡辺最左衛門によって再建された朱塗りの堂宇で、本尊は地藏菩薩である。

頭上の天井には花鳥人物等が描かれ、大きな絵馬が数枚奉納されている。

もくぞうじ ぞうぼさつりゅうぞう
木造地藏菩薩立像

地藏菩薩は、釈迦入滅後、現世の人々の苦を除き、福を与える菩薩として信仰されている。

本像は檜材の寄木造り、鎌倉の円覚寺の長老から送られたと伝えられる。額の白毫と目には水晶がはめており、参拝するとその視線に驚かされる。

右手の錫杖には、「大地蔵菩薩 長友之村、本願行海十穀、造工源十郎 永禄12年(1569)6月1日」の銘が刻まれており、修復されたことがわかる。

貞享3年(1686)7月、磐城平藩主内藤義孝が、この仏像を修理のために一時平城に移し、寺に戻した記録がある。また、この像が子どもの姿となって田の作業を手伝ったという伝説があり、親しまれている。

木造地藏菩薩立像 国指定重要文化財(彫刻)
長隆寺蔵 南北朝時代 (像高 176.5 cm)
『いわき市の文化財』2017



いわき 岩城氏

岩城氏は、陸奥国岩城郡の中世の豪族で桓武平氏の武士、常陸大掾平国香の子孫と伝えられている。常陸は今の茨城県で、大掾は国の地方役人の官職位である。

平安時代の末に岩城郡に移り住み、新しい田畑を開墾し、自分の領地とし、岩城氏と名乗った。奥州藤原氏や清原氏とも縁を持ち、この地の地頭を勤めていたと考えられる。鎌倉時代初期、岩城清隆は奥州合戦で源頼朝に味方し、ほうびとして「好島荘」を預かる地頭となった。



鎌倉時代の地名

『みんなで学ぼう いわきの歴史』2023



八茎寺薬師堂 (2024年6月撮影)

はつきょうじ 八茎寺

仏生山常光院八茎寺は、真言宗智山派の寺。

平安時代に僧徳一が磐城三薬師のひとつとして薬師堂を建てたと伝えられる。

この薬師には隆忠の伝承がある。岩城清胤には子がなく、当薬師に祈ったところ、子が誕生した。その掌に隆忠(薬王寺の元住職)の文字があったという。後年、岩城隆忠は薬王寺を再建した。

*「やぐきじ」と読む資料もあるが、住職に確認したところ、「はつきょうじ」と伝えられていた。

いわき 岩城氏の居城

鎌倉時代の文書等より、地頭岩城氏の本拠地は大野郷にあったと考えられる。岩城氏の一族は、周辺の土地を分けてもらって館を建てて住み、その土地の地名を名字にしていた。鎌倉幕府と関係結び、住んでいる土地を領地として認められていた。

室町時代になると、白土城にいた岩城氏の勢力が強くなり、常磐にいた岩崎氏を滅ぼし、他の武士たちを抑えて、岩城地方を統一した。

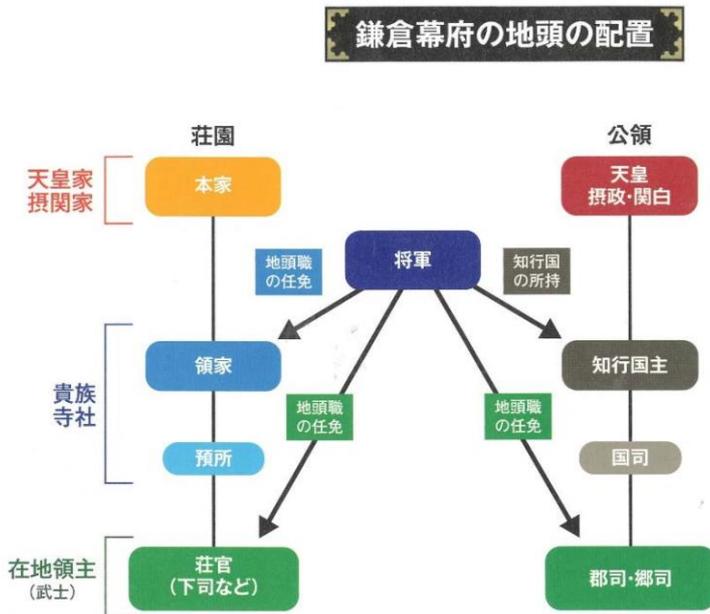


●鎌倉・室町時代の主な城あと

市内では、鎌倉時代から室町時代の城あとが200以上見つかっています。

『みんなで学ぼう いわきの歴史』2023

鎌倉幕府と地頭



『「荘園」で読み解く日本の中世』

伊藤俊一 監修 宝島社 2023

奈良時代は公地公民(土地と人民はすべて国の所有)だったが、新田開発等で例外的に私有を認めると、貴族や寺社、後に武家も荘園(私有の農園)を持つようになった。

文治元年(1185)、源頼朝は、天皇の許可を得て各地の荘園、公領に地頭として御家人(頼朝と主従関係を結んだ武士)を任命した。地頭は地方の役人や地方の有力者である武士から選ばれ、警察権や徴税権を持った。

鎌倉幕府が地頭の任命権を得たことで、貴族や寺社の力は弱まり、次第に武士が力を持つようになった。

たきやしゃひめ がいこつ

滝夜叉姫と骸骨の図



※国立国会図書館デジタルコレクション (インターネット公開)

歌川国芳くによしによる弘化 2-3 年(1845-1846)頃の錦絵。滝夜叉姫は、げんこうしゃくしょ『元亨釈書』の平将門の娘で、恵日寺に伝説が残る如蔵尼がモデルと考えられている。元々は武家の女性と地藏信仰が結びついた話であったが、近世になって伝説化され、弟良門と源氏に復讐する話に発展。これをもとにした山東京伝の読本『善知鳥安方忠義伝』うとうやすかたちゅうぎでん(1806)により、姫の怨念と復讐の話が定着し、歌舞伎や浄瑠璃に登場するようになった。

もくぞうみょうけんそんりゅうぞう
木造妙見尊立像

寺伝によれば、康暦元年(1379)、鏡仁は、妙見寺を開山し、ご本尊の妙見尊を千葉から迎えてお祀りしたと伝える。現在は、廃寺となり、妙見堂に祀られている。

妙見尊は、妙見菩薩とも言われ、北極星もしくは北斗七星を神格化したものと考えられている。

平安時代の中期から関東に勢力をはった桓武平氏の間には、妙見信仰が強く普及していた。

千葉常胤は奥州合戦の論功として、好島荘の預所職を受けられた。常胤の四男である大須賀胤信がこの預所職を引き継ぎ、大須賀氏が当地方に移住するに従って、妙見信仰も移されたとみられる。



木造妙見尊立像
県指定重要文化財(考古資料)
妙見堂蔵 鎌倉時代(像高 27 cm)
『いわき市の文化財』2017

*「中世の年表」(p8)は、「預所職」を「代官」で代用。

『いわき民報』

令和6年6月6日 第15面

四倉・玉山地区で雨乞い儀式

玉山農事組合 農家ら適雨・適照願う

四倉町表玉山区の田んぼの一角にある小さな祠で2日、「雨呼び」と言われる珍しい伝統儀式が行われた。祠には「雷神様」が祭られており、田植えの作業が一段落する6月の第1日曜日、農家を営む表玉山区の住民が集まり、五穀豊穡のための適雨・適照を祈願。いまは玉山農事組合(高木淑裕組合長)が主催しており、今年は住民ら15人が祠の傍らにたすみ、雷神様の依り代となっている一本杉を前に読経と献杯をささげ、豊かな実りを願った。



四倉・大野地区を中心とした範囲で行われていた。に長く郷土史を研究し、田植えのときになっても大野公民館の市民講師も「雨が降らないと、区長が務める馬上喜好さんの研儀式の触れを村に出し、研究資料によると、雨乞い村人たちは雲ひとつな儀式は、大正時代の末まで「カンカン照り」でもるまではいわき地区の広範囲で雷神様の祠の前

に集合、空に向かって大声で「雨呼び」の唄えをこをうたうという。雨乞いから残っているか記録に残っていないため定かではないが、代々の農家が受け継ぎ、儀式が終わるまで、祠の前で飲食をした

また、祠の傍らに立つ雷神様の祠の前で行われた雨乞い儀式。杉の木は「雷神様の一本杉」と呼ばれ、雷神様の依り代とされるが、今の一本杉は3代目で高さは15ほど。樹齢は約50年。2代目が善一番の強風で倒れたあと、1976(昭和51)年5月に住民たちが植樹した。玉山区長の荻恒夫さんの初代は病気で幹の中心が空洞になり、ダメになった。田んぼが近く湿った土地なので、根が成長する地中の水分の影響で傷んでしまつた。振り返るが、周辺の田んぼは2年後に圃場整備が計画されており、杉の木

も祠の移転とともに新たに植えることが検討されている。ただ、雨呼びの儀式は表玉山区の伝統行事として今後も続けたい。

◇ 当日は紅白の垂れ幕やのぼり旗がはためく中、真言宗智山派の寺院で福島八十八カ所霊場でもある金光寺(四倉町玉山)の監原法明副住職が祠の前で読経をした後、住民らが献杯をささげ、適雨・適照とともに五穀豊穡を祈願した。

伝承にあるように蓑笠姿ではないが、住民たちは日照りや水害なく無事に秋の実りを迎えることを願っていた。

令和6年3月、空海が祈祷で雨を降らせたといわれる京都の神泉苑で1200年を記念する法要が行われた。

四倉地区の雨ごい行事は、いわき市内で唯一続けられている。

太古の地層、文化財、農産品と水産物に恵まれた四倉は、自然と共生している。

>>> 関連資料 <<<

○地形関係

- ◆『いわき市・東日本大震災の証言と記録』 いわき市 2013 (K/369/イ)
- ◆『いわきの地誌』 いわき地域学会 2016 (K/291/イ/2016)
- ◆『夏井川とともに20年』 夏井川流域住民による川づくり連絡会 2022 (K/517/ナ)
- ◆『福島県の河川』 福島県土木部河川課 1969 (K/517/フ)
- ◆『土地分類基本調査 平』 福島県農林水産部農地計画課 1994 (K/450/フ)
- ◆『未来へつなぐ「いわき」ものがたり』 いわき市 2016 (K/318.2/イ)
- ◆『みんなで学ぼう いわきの歴史』 新版 いわき市教育委員会 2023 (K/210.1/1/イ)
- ◆『四倉の歴史と伝説』 本多徳次 || 著 四倉郷土史資料集成刊行会 1986 (K/210.1/1/ホ)

○古生代

- ◆『いわき化石ガイド』 いわき市観光物産協会 2007 (K/457/イ)
- ◆『いわき市史 第5巻 自然・人文』 いわき市 1973 (K/210.1/1/イ)
- ◆『いわき市の文化財』 いわき市教育委員会 2017 (K/709/イ)
- ◆『いわきの化石 2 無脊椎動物・植物編』 いわき市教育文化事業団 2015 (K/457/イ)
- ◆『いわきの化石 3 新たな発見』 いわき市教育文化事業団 2023 (K/457/イ)
- ◆『日本列島地質総覧』 朝倉書店 2022 (455.1/ニ)
- ◆『日本地方地質誌 2 東北地方』 日本地質学会 || 編 朝倉書店 2017 (R/455.1/ニ/2)
- ◆『ふくしま5億年の自然史』 福島県立博物館 2017 (K/450/フ)
- ◆『月刊アンモナイト通信』

○古 代

- ◆『荒田目条里遺跡』 いわき市教育委員会 2001 (K/210.2/1/イ/75)
- ◆『石城国建国千三百年展』 いわき市考古資料館 2018 (K/210.3/1/イ)
- ◆『いわきの遺跡めぐり』 いわき市観光物産協会 2006 (K/291-ナ)
- ◆『いわきの古代』 いわき市教育委員会 2009 (K/210.3/1/イ)
- ◆『いわきの古墳時代 1』 いわき市教育文化事業団 2021 (K/210.2/1/イ)
- ◆『いわきふるさと大百科』 郷土出版社 2007 (K/210.1/1/イ)
- ◆『海から読み解く日本古代史』 近江俊秀 || 著 朝日新聞出版 2020 (K/683/ホ)

- ◆『国史跡 根岸官衙遺跡群』 いわき市教育委員会 2008 (K/210.2/1/イ)
- ◆『常磐自動車道遺跡調査報告 11』大猿田遺跡(2次調査)本文
福島県教育委員会 1998 (K/210.2/1/7/11/1)
- ◆『諸本集成倭名類聚抄 本文篇』 源順 || 著 臨川書店 1981 (R/813.2/ワ/1)
- ◆『図説 いわきの歴史』 郷土出版社 1999 (K/210.1//1/イ)
- ◆『玉山古墳』 いわき市教育委員会 2009 (K/210.2/1/イ)
- ◆『地図からいわきの歴史を読む』 鈴木貞夫 || 著 2002 (K/210.0/1/ス)
- ◆『東北「海道」の古代史』 平川南 || 著 岩波書店 2012 (K/212.3/ヒ)
- ◆『戸田条里遺跡』 福島県いわき農地事務所 1991 (K/210.2/1/イ)
- ◆『夏井廃寺跡』 いわき市教育委員会 2004 (K/210.2/1/イ/107)
- ◆『根岸遺跡』 いわき市教育委員会 2000 (K/210.2/1/イ)
- ◆『南奥(ふくしま)の古代通史』 鈴木啓 || 著 歴史春秋出版 2009 (K/210.1/0/ス)

○中世

- ◆『いわき市史 第1巻 原始・古代・中世』 いわき市 1986 (K/210.1/1/イ)
- ◆『いわき市史 第2巻 近世』 いわき市 1975 (K/210.1/1/イ)
- ◆『いわき市史 第6巻 文化』 いわき市 1978 (K/210.1/1/イ)
- ◆『いわき市史 第8巻 原始・古代・中世資料』 いわき市 1976 (K/210.1/1/イ)
- ◆『岩城氏と岩崎氏の中世』 中山雅弘 || 著 高志書院 2024 (K/210.4/1/ナ)
- ◆『いわきのお寺さん』 今井速水 || 編 協和印刷 1991 (K/185/イ)
- ◆『いわきの板碑調査報告書』昭和62年度 いわき市教育委員会 1988 (K/186/イ)
- ◆『いわき史跡めぐり』 佐藤孝徳 || 著 いわき市観光物産協会 2003 (K/291/サ)
- ◆『いわきの文化財』 今井速水 || 編 いわきの文化財出版会 1983 (K/709/イ)
- ◆『今昔物語集 3 本朝部』 平凡社 2007 (913.3/コ/3)
- ◆『荘園』 伊藤俊一 || 著 中央公論新社 2021 (S/210.4/イ)
- ◆『「荘園」で読み解く日本の中世』 伊藤俊一 || 監修 宝島社 2023 (210.4/シ)
- ◆『神道大系 続 論説編 元亨釈書和解 3』 神道大系編纂会 2005 (170.8/シ/155)
- ◆『日本架空伝承人名事典』 平凡社 2012 (R/281.0/ニ)
- ◆『浜通りの仏像』 福島県立博物館 1991 (K/069/ハ)
- ◆『四倉郷土史資料集成 第5輯』 本多徳次 || 著 四倉郷土史資料集成刊行会 1982 (K/210.1/1/ホ)
- ◆『四倉郷土史資料集成 第6輯』 本多徳次 || 著 四倉郷土史資料集成刊行会 1986 (K/210.1/1/ホ)

協 力

恵日寺

高倉山古生層所有者

長隆寺

妙見堂

薬王寺

いわき市アンモナイトセンター

いわき市考古資料館

いわき市石炭・化石館

いわき市大野公民館



企画展「古代と中世の四倉」

令和6(2024)年11月29日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館

■会期 令和6(2024)年10月29日(火) -
令和7(2025)年6月15日(日)

■会場 いわき総合図書館 5階 企画展示コーナー

